

教育データの利活用に関する有識者会議（第19回）

令和5年度「教育データの効果的な分析活用
に関する調査研究」事業について



令和6年1月12日
松阪市教育委員会

これまでに蓄積された教育データ

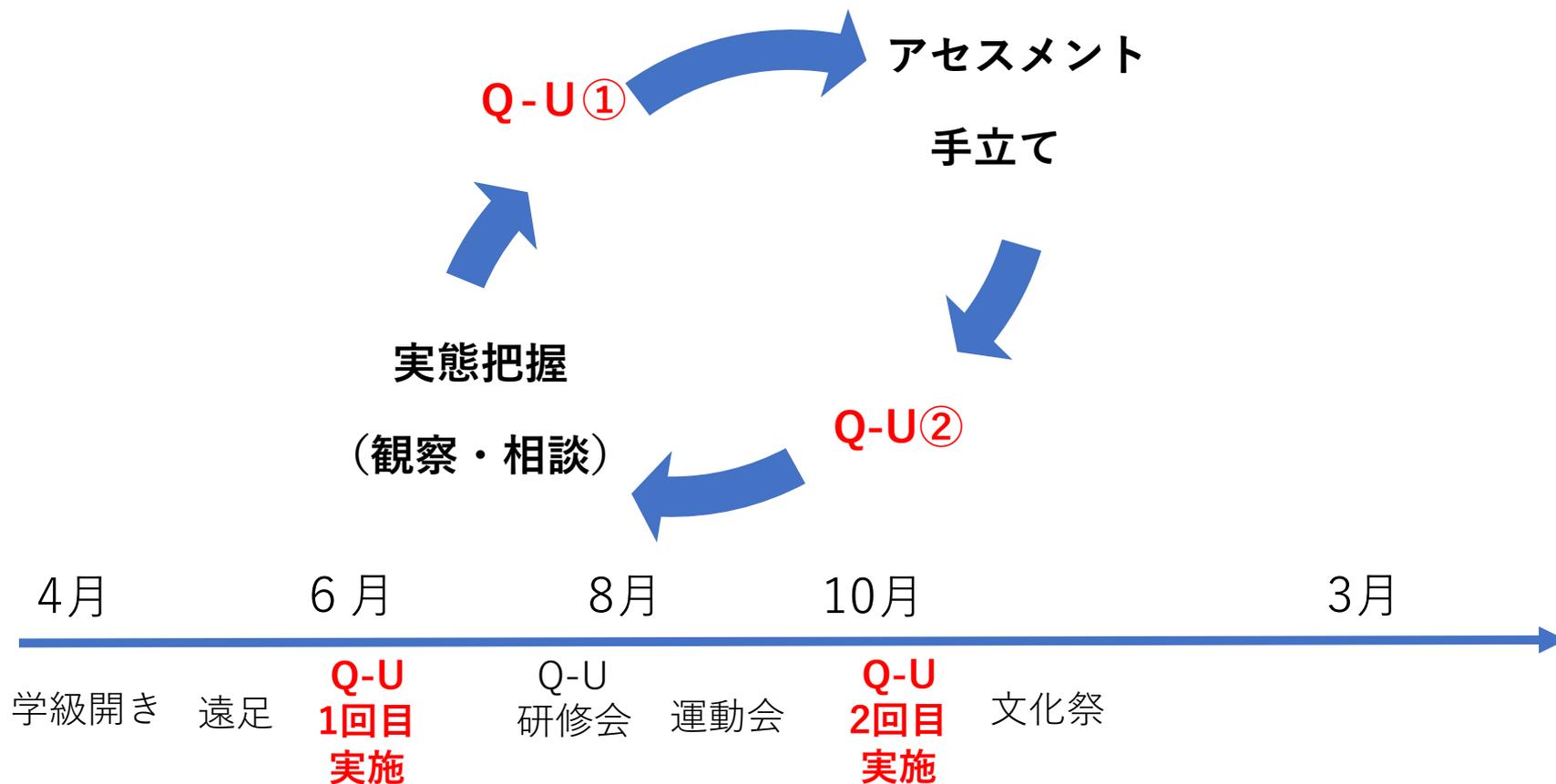
学習系

校務系

各種調査

データ利活用の具体例

Q-U（学級満足度調査）では…



※単一のデータとして利活用

単元テスト
成績表 定期考査
学習系
予定帳 (ふり返り)
スタディログ

出席簿 不登校数
問題行動報告
校務系
保健室来室数 各種検診
教員ストレスチェック
出退勤簿

全国学調
県学力テスト
市学力テスト
各種調査
学校評価 新体力テスト
Q-U調査

【データ形態】
紙
電子

【データの保管場所】
教育委員会
学校
各種システム

多面的で多様な
データ分析の可能性

2 松阪市教育委員会

松阪市の教育ビジョン

- ・ 基本理念「夢を育み 未来を切り拓く 松阪の人づくり」

松阪市の課題

- ・ 不登校の児童生徒数が増加（特に中学校1年生での増加）
- ・ これまでも不登校対策に注力してきたが、予兆の見取りやさらなる対応策が必要
- ・ 児童生徒に関わるデータ（学習、生活等）を扱う部署が分散
- ・ 若手教員の不登校児童生徒に対する経験の不足

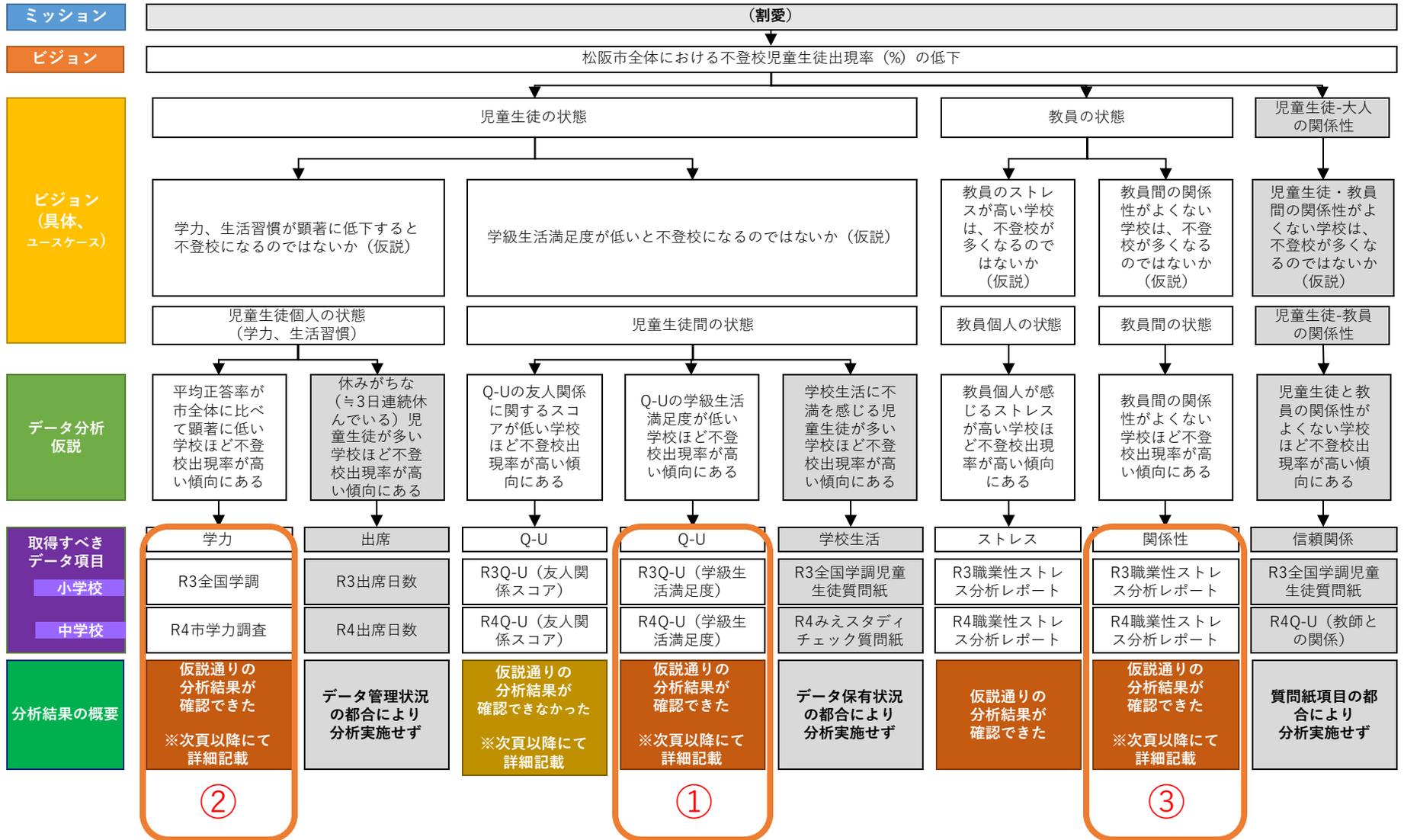
昨年度のデータ分析の概要

- ・ 学力に関するデータと、学級満足度に関するデータの相関関係を分析し、不登校の要因を発見し、本市の教育施策の方向性につなげる

今年度のデータ分析の概要

- ・ 各部署が保有している多様なデータを活用することにより、不登校の予兆・要因等
を発見し、当該校の対応に関する指導・助言につなげる

3 ロジックツリーの検討



4 分析結果①-1

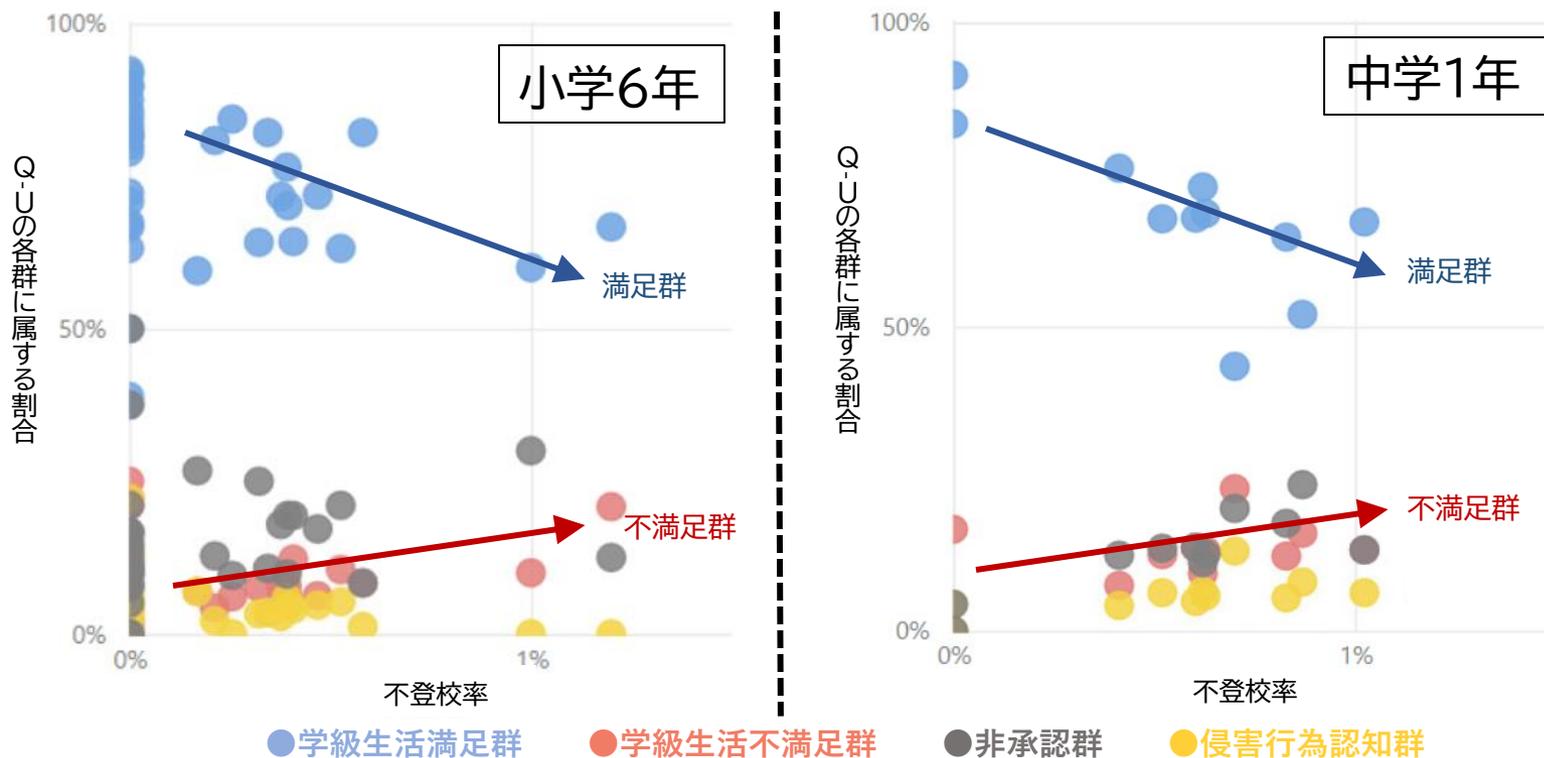
○当初仮説と合致した結果を得た分析内容（予想通りの結果）

◆Q-U（学級満足度尺度調査）に関する分析

対象を変えずに分析
・R3年度小学校6年生
・R4年度中学校1年生

- ・ 不登校率とQ-Uの相関関係が読み取れる。

特に、学級生活満足群の割合が低いと不登校率は上がる（水色）
学級生活不満足群の割合が高いと不登校率は上がる（赤色）



4 分析結果①-2

○当初仮説と合致した結果を得た分析内容（予想通りの結果）

◆学力（各種学力調査）に関する分析

対象を変えずに分析

・R3年度小学校6年生(全国学力・学習状況調査)

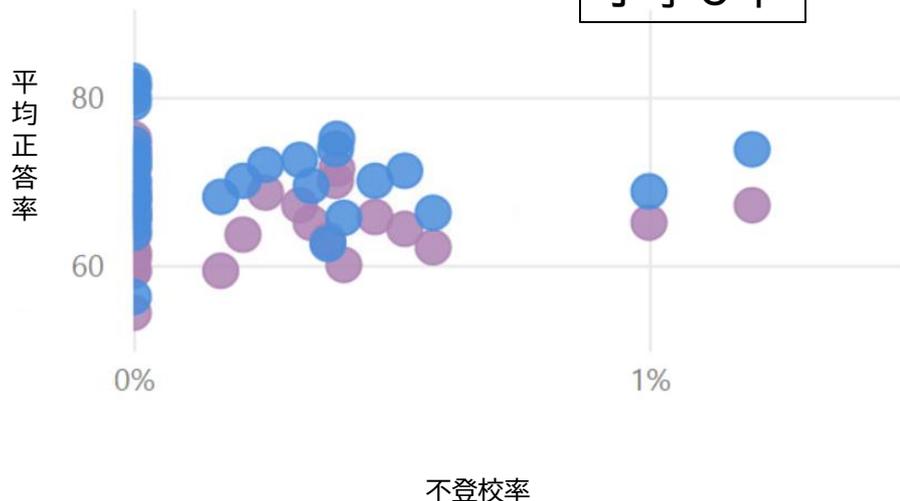
・R4年度中学校1年生(松阪市標準学力調査)

・中学校では、不登校率と学力調査結果の相関関係が読み取れる。

国語、数学ともに平均正答率が低いと不登校率が上がる。

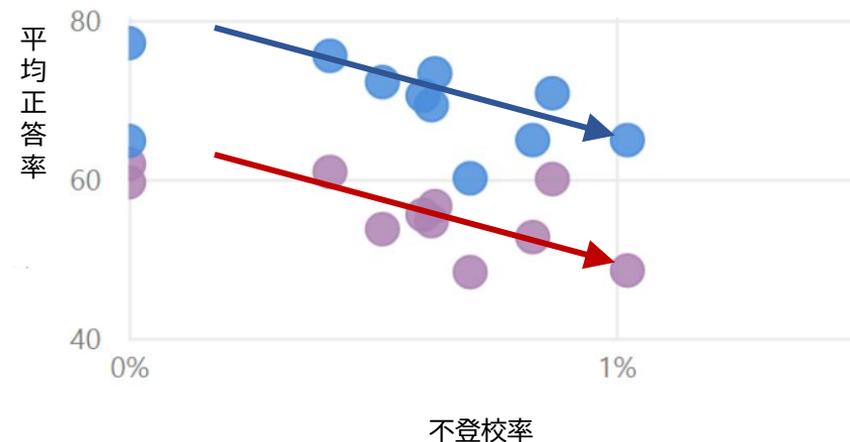
教科 ●国語 ●算数

小学6年



教科 ●国語 ●数学

中学1年



4 分析結果①-3

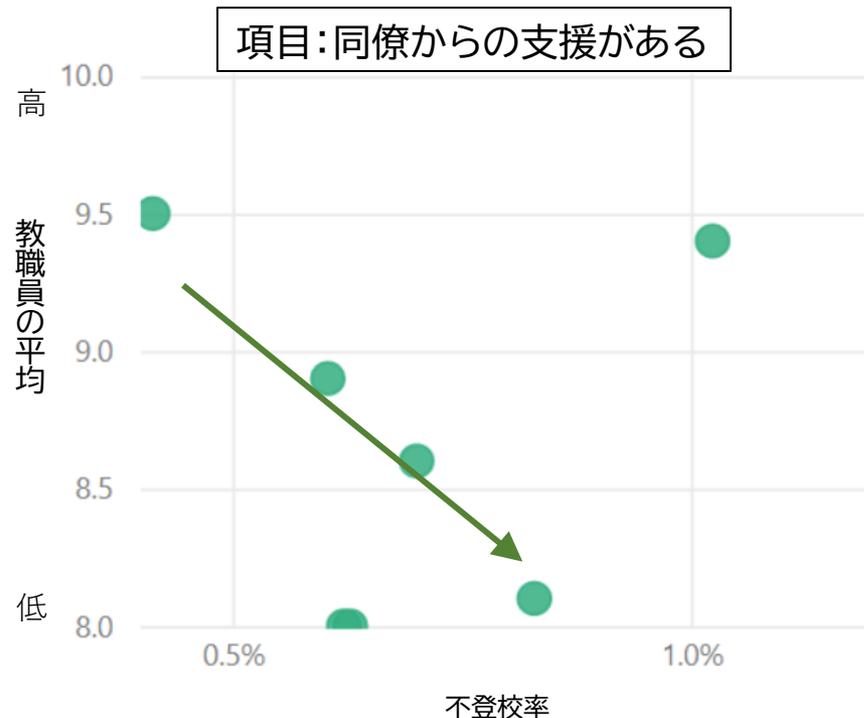
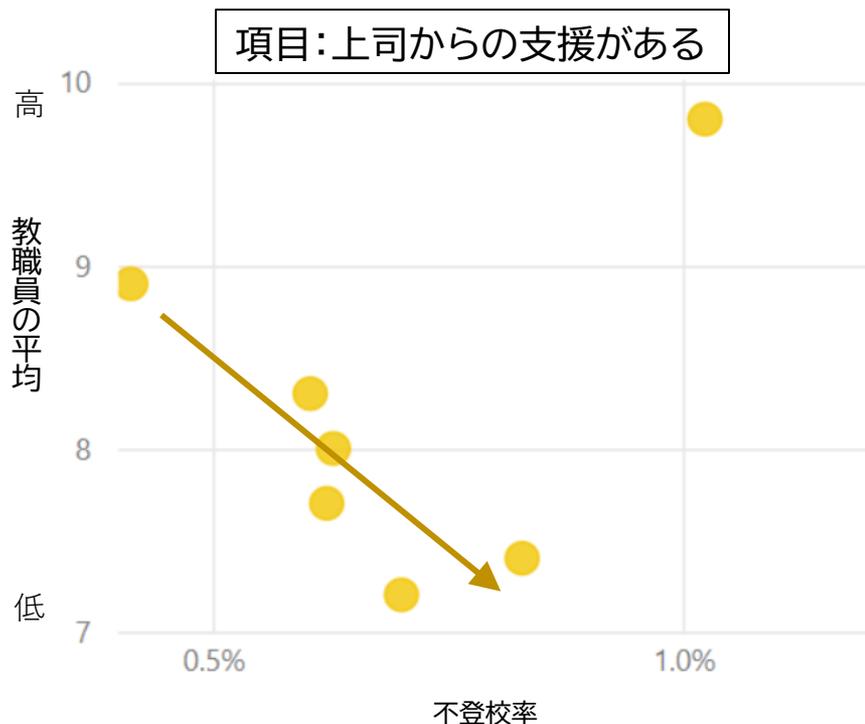
○当初仮説と合致した結果を得た分析内容（予想通りの結果）

◆教員間の状態に関する分析

※対象校は1学年3クラス以上の中学校

- ・ 不登校率と教員間の状態は相関関係が読み取れる。

上司や同僚からの支援が低いと不登校率は上がる。



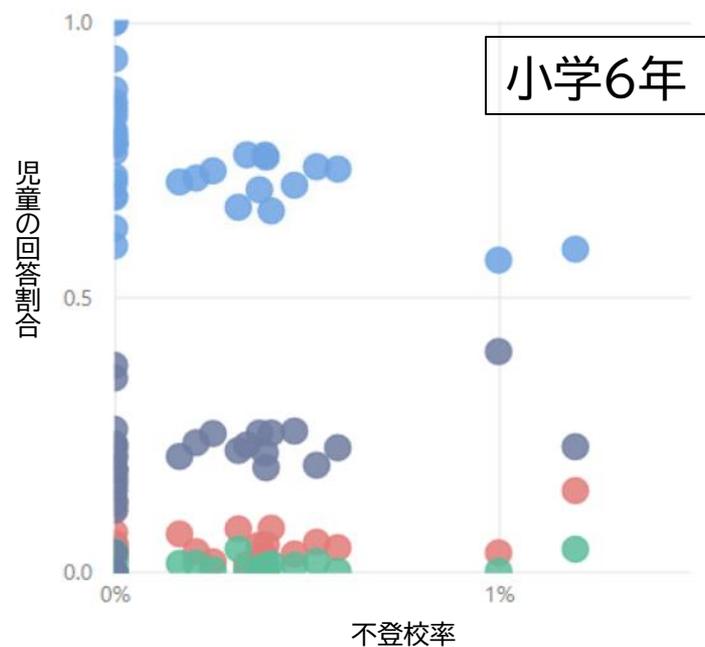
4 分析結果②

○当初仮説と乖離した結果を得た分析内容（予想外の結果）

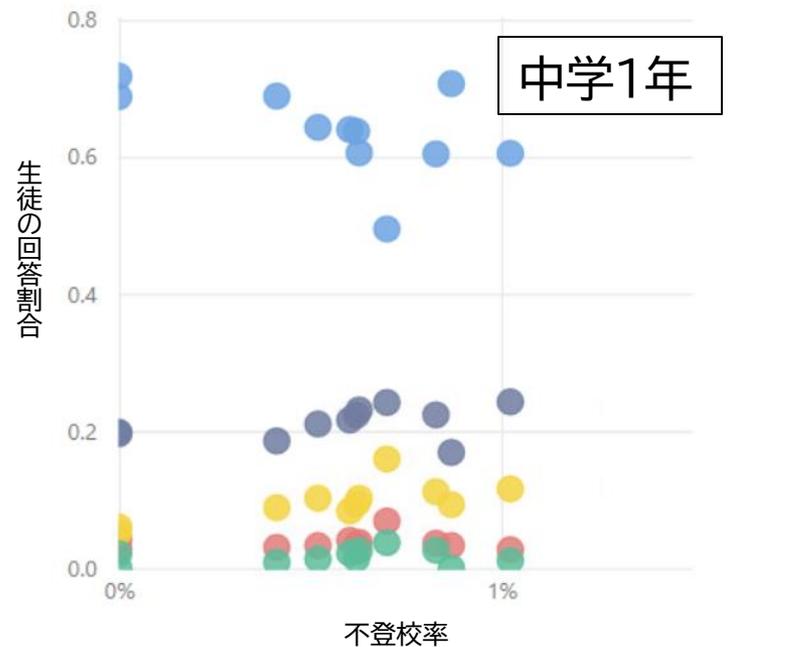
◆Q-U（学級満足度尺度調査）の「友達関係」に関する分析

対象を変えずに分析
・R3年度小学校6年生
・R4年度中学校1年生

- ・不登校率とQ-Uの「友達関係」は相関関係が読み取れない。



●とてもそう思う ●少しそう思う
●あまりそう思わない ●全くそう思わない



●とてもそう思う ●少しそう思う ●どちらとも言えない
●あまりそう思わない ●全くそう思わない

5 事業所感

成果

- ・ 各部署の保有する各種データを連携することにより、多面的に分析・活用できた。
- ・ Power BIの機能（スライサー・絞込等）を活用することにより、膨大な量のデータを容易に比較検討できた。
- ・ 結果分析により、本市の取組についての確認ができ、今後の見通しが明確になった。

課題

- ・ 多様なデータの一元化
- ・ 子どもに関わる非構造化データ（画像・動画・音声なども含む）の蓄積
- ・ 学習、生活状況等の日常的なデータの収集（児童生徒・教員等）を図るためのシステムの構築

6 今後の展望

データの利活用でめざす姿と期待する効果

学校・教職員

- ・ICT活用により単純作業を効率化し、教材研究の時間を確保する。
- ・学級状況をデータから把握し、きめ細かな指導に活かす。
- ・受け持つ児童生徒に適した教材を見つけやすくする。



地域・保護者

- ・身体的・心理的発達段階や、子どもの状態を把握する。
- ・子どもの認知・非認知能力を把握する。
- ・家庭学習と学校教育が一体となったサポートを実施する。



児童生徒

- ・興味関心をのばして、いつでもどこでも学べる環境とする。
- ・自身の特性に合わせて、自分らしい学び方を選べるようにする。



大学・研究機関

- ・教員の知見を可視化して、指導に活かす。
- ・データから得られる知見を指導要領や制度に活用する。



行政機関

- ・個に対するプッシュ型の支援を行いやすくする。
- ・EBPMにより政策立案・改善を行いやすくする。

